

書 評

鈴木英壽著『ドイツ經營學の方法』

(昭和三十四年三月、森山書店)

雲 嶋 良 雄

第二次大戦後、あげてアメリカ經營學に傾倒し、アメリカ管理技術の導入に努めてきた、わが國の經營學は、今や重大な理論的反省の時期に立ち至っている。けだし、個々の管理技術を正しく活用し、經營的生産の合理化に役立てるためには、こうした個々の管理技術に關する個別的な研究のみをもつては充分ではなく、更にこれら管理技術を全體としての經營的生産過程のうちに、正しく定位せしめるための理論、すなわち經營の理論が明らかにされなければならないからである。ところで、こうした理論的反省をなさんとする場合、何よりも、まず、われわれの念頭に浮ぶものは、戦後におけるドイツ經營學の動向であろう。戦前におけるわが國の經營學が、ドイツ經營學の強

い影響をうけ、その理論的基礎を主としてドイツ經營學に求めて來たいきさつからみても、こうした重大な反省の時期に、われわれが再びドイツ經營學に注目し、そこに何らかの手掛りを求めんとすることは、むしろ當然といわなければならない。

ここに紹介せんとする、鈴木英壽教授の近著「ドイツ經營學の方法」は、第二次大戦後のドイツ經營學の動向を、方法論的見地より、明らかにせんとしたすぐれた勞作であり、經營學の理論的反省に悩みつたあるわれわれにとって、きわめて意義深い研究であるといふことができる。本書は二部から構成されている。第一部「ドイツ經營學と方法論」は、戦後のドイツ經營學における方法論を、グーテンベルク(E. Gutenberg)の學說をめぐって展開された方法論争を中心として考察せるものであり、第二部「ドイツ經營學と價值問題」は、この方法論争において重要な問題點となつた、經營における價值論に關する研究である。以下われわれは第一部を中心として、簡單なる紹介を試み、これについて若干の疑問點を指摘したいと思う。

著者はまず、戦後、グーテンベルクの經營學說をめぐって展開された方法論争の内容をあとづける。そしてこの方法論争を契機として次第に表面化するに至つた、ドイツ經營學の三つの動向を明らかにせんとする。(第一章、第二章、第五章、第六章)すなわち著者は、まず第一に、方法論争の出發點をなしたところのグーテンベルクの學說およびこの學說を支持するシュ

ヴァンターク(Schwanitz)、ヴァンエンニツミット(Waithenschmidt)等の主張をとりあげ、そこに「純粹科學としての經營學」の特質を把握せんと努める。著者によれば、この學派の特質は、それが立脚する沒價値的考察方法に見出される。換言すれば純粹科學における認識は、あくまで「現實の確認」ないし「存在の説明」の範圍にとどめられ、目的又は手段に關する價值判斷はすべて排除せられる。したがって、この場合における認識は、何らかの目的を達成するための手段としてではなく、むしろそれ自體を自己目的として追求されるのである。第二に著者は、グーテンベルクの學說に對して峻烈な批判を展開したメレロウィッチ(Melero-wicz, K.)の學說および、後説を支持するシェーファー(Schäfer, E.)、ハックス(Hax, K.)、モクスター(Moxter, A.)、カインホルスト(Keinhorst, H.)等の主張をとりあげ、そこに「應用科學としての經營學」の特質を理解せんとする。著者によれば、この學派の特質は、それが認識の利用性を問題とし、目的に對する方法手段を示さんとすることに現出される。換言すれば、應用科學においては、與えられた目的に對して方法手段が適合しているか否かが問題とされねばならず、したがって、この場合にはある種の價值判斷が必要となる。しかし、この價值判斷は、本來の價值判斷「bekennende Werturteile」とは異なり、「erkennende Werturteile」と呼ばれるものであり、經驗的に確かめうるものであることが注意されねばならない。したがって、この學派も亦基本的には沒價値的方法に立脚するものと解することができ

る。第三に著者は、グーテンベルク學說に對するいま一つの批判者として、フィッシャー(Fischer, G.)およびレッフエルホルツ(Löffelholz, J.)等の主張をとりあげ、その吟味を通して「規範科學としての經營學」の存在を確めんとする。著者によれば、「規範科學としての經營學」の特質は、目的そのものを問題とし、當爲ないし規範を確立せんとするところに見出される。したがってこの場合にも價值判斷が必要となるわけであるが、この價值判斷はすでに經驗的根源のものではなく、先驗的なものであり、もはや事實にもとづいて説明し得ない。かくて規範科學においては、沒價値的考察方法は拒否されざるを得ないのである。

こうして著者は、戦後のドイツ經營學を、方法的見地から分析し、そこに沒價値的科學に屬する「純粹科學的傾向」と「應用科學的傾向」、價值判斷的科學に屬する「規範科學的傾向」という三つの傾向の存在を明らかにせんとする。尤も、經營學における、このような三つの流れは、戦後に至ってはじめてあらわれたものではない。すでに一九三三年に出版せられた、シェーンブルークの「個別經濟學の方法問題」(F. Schönpflug, Das Methodenproblem in der Einzelwirtschaftslehre, 1933)において、ドイツ經營學は、規範學派、技術論學派、理論學派の三つに區分せられている。しかし戦後におけるドイツ經營學の三つの傾向は、けっしてシェーンブルークにおける三つの學派分類と、その内容を等しくするものではない。とりわけ、シェーンブルークにおいて、その科學性を否定せられていた技術論

學派の新たな擡頭と、その應用科學としての存在の主張こそは、戦後のドイツ經營學のいちじるしい特長をなすものといふことができる。著者が第三章および第四章において、とくにホステッター (Hostettler, E.) およびグリヒティング (Griching, E.) の企業經濟學 (Unternehmenswirtschaftslehre) をとりあげ、その内容を吟味する所以はここにある。

三

以上が「ドイツ經營學と方法論」と題する本書第一部の要旨である。われわれはこれによって、今日まで充分に明らかにされていなかった、戦後のドイツ經營學の動向を、かなり明確に把握することができる。しかも著者は、こうした考察をなすにあたって、たんに既成の經營學方法論を超越的に適用するのではなく、あくまで戦後の方法論争の内容に注目し、論争にあらわれた諸學說の内在的理解を通してドイツ經營學の特質を明らかにせんと努めている。このような著者の眞摯なる考察態度は、その丹念なる文獻涉獵とあいまって、本書の内容を一層興味深いものとしているように思われる。

しかし若干の疑問點もないわけではない。まず第一に、著者のこのような内在的把握への努力は、果して充分に展開されえたのであろうか。例えば、著者がグーテンベルクの學說のうちに、「純粹科學としての經營學」の特質を理解し、又、メレロウィッチの主張のうちに、「應用科學としての經營學」の特質を見出し、更にレフフェルホルツの理論のうちに「規範科學として

の經營學」の特質を把握せんとする場合(第一章)、それらが、いかなる意味において、いかなる根據にもとづいて、そうであるのかという點は、必ずしも明瞭ではない。とくに著者の重視する、グーテンベルクにおける函數理論と純粹科學的方法との關係、メレロウィッチにおける經營經濟的價值論と應用科學的方法との關連、更にはレフフェルホルツにおける經營學の社會學への接近と規範科學的方法との關連については、なお吟味さるべき問題が残されているように思われる。

第二に、このようにして確かめられたドイツ經營學の方法の、科學性に關する吟味は、果して充分になされたのであろうか。著者も指摘する如く、學問の科學的性格は、その論理的構造から判斷されるのみならず、さらにその學問に對して設定された課題からも判斷されねばならない(一〇一頁)。このうちまず論理的構造からする科學性の判斷に關して、われわれは少くとも二つの疑問を指摘しなければならない。その一つは、價值判斷の客觀性に關して最も問題の多いと思われる規範科學的方法について充分なる方法論的吟味がなされていない、という點であり、今一つは、戦後のドイツ經營學を特色づけるものとして著者の強調する「應用科學」の科學性に關しても、必ずしも充分なる検討がなされておらず、このために、著者のいわゆる「たんなる技術論」と「應用科學」との相違が明確に浮かびあがっていないという點である。次に、經營學に對して設定された課題からする科學性の吟味に關して、著者は、一方において規範科學としての經營經濟學の成立を認めると共に、他方で

は、「經營經濟學は沒價値的な純粹科學としても、あるいはまた、實踐的技術的應用科學としても成立可能である」(一〇一頁)と述べて、ドイツ經營學の三つの方法をすべて肯定し、そのいずれが經營學の課題からみて眞に妥當なるものであるかという點に關しては、何ら立入った考察をなしていない。われわれはここに少なからぬ不満を懷かざるをえないのである。尤も著者の主たる關心は、このようなドイツ經營學の方法それ自體の吟味よりも、むしろかかる方法論的見地よりする學派分類に

向けられていようにも思われる。しかし、かりに學派分類に主題があるとしても、かかる分類の基礎をなすところの經營學の方法に關しては、いま一步立入った吟味がなさるべきではあるまいか。けだしこのような精密な方法論的吟味を通してはじめて、學派分類そのものも充分なる意味をもつに至るものと考えられるからである。

(一橋大學助教授)